認知症ケアの新たなステージへ

ー「認知症ライフサポート」という考え方

生活研究部 准主任研究員　山梨 恵子
yamanasi@nli-research.co.jp

ニッセイ基礎研究所が事務局を務める、平成25年度老人保健健康増進等事業「「認知症ライフサポートモデル」を実現するための認知症多職種協働研修における効果的な人材育成のあり方に関する調査研究事業」では、認知症ケアのさらなる伸展を期して「認知症ライフサポートモデル」の普及・推進に取り組んでいる。本稿は、この「認知症ライフサポートモデル」の概要を説明するとともに、このモデルをベースにつくられた「認知症ライフサポート研修」を、幅広く開催していただくことを提案するものである。

1──「認知症ライフサポートモデル」作成の背景にある課題

「認知症ライフサポートモデル」とは、「認知症の人への医療・介護を含む統合的な生活支援」を意味している。もとをただせば、介護保険制度施行以降たびたび言われてきた「新しい認知症ケアモデルの確立」「認知症ケアの標準化」「科学的根拠に基づく認知症ケア」などの求めに応じて立ち上げられた、「認知症サービス提供の現場からみたケアモデル研究会」（平成23年度老人保健健康増進等事業）の中で考案された認知症ケアモデルである。

この研究会では、認知症ケアに関わる医療、介護等の有識者が一堂に会し議論をスタートしたが、当初は迷走状態にあった。そもそも認知症ケアの標準化とは何かを議論する前に、それぞれの専門領域や立ち位置によって、認知症ケアに対する課題認識自体が実に多様であることがわかった。認知症という病気の捉え方の違い、支援内容や優先順位に関する考え方も様々あり、また、認知症の人が支援を求める最初の段階でどこにつながるかによっても、その後の暮らしそのものが大きく変わってしまうという実態が見えてきた。

2──「認知症ライフサポートモデル」とは

専門職ごとに認知症を捉える視点やアプローチ方法の違いがあるのは、ある意味当然のことかもしれない。しかし、一人の認知症の人の立場から見たとき、それぞれの動きが一体感のあるチームケアとなっていることが大切である。研究会が提言すべき「新しい認知症ケアモデルの確立」や「認知症

ケアの標準化」とは、けっして症状別の対応方法をマニュアル化するような話ではなく、認知症の人に関わる様々な専門職による連携や協働によって実現する、トータルサポートケアのモデルなのではないかという考えが、議論を重ねていく中で関係者の共通認識となっていったのである。

その根本的なこと。いわば認知症ケアのベースづくりのようなねらいが、この認知症ライフサポートモデルという言葉にはこめられている。

ライフ（Ｌｉｆｅ）は、「生命」「生活」「人生」等の意味があり、その人が生きてきた人生や、出会いから終末までの継続的な関わりが含まれる言葉である。

サポート（Ｓｕｐｐｏｒｔ）は、支える、支持する等の意味があり、主体は本人であることを前提とする言葉である。

「認知症ライフサポートモデル」とは、これまで曖昧だった「認知症ケア」の概念を、認知症の人の生命、生活、人生をまるごと支えていくケアであるということ、そして、その主体は認知症の人自身であることを明文化したものと言える。認知症の人の生命、生活、人生は、医療の領域だけとか、介護の領域だけとか、一部の専門職だけで支えていけるものではない。本人の必要に応じて、医療と介護を含む様々な専門領域、社会資源がつながりながら、統合されたチームケアを提供していくことの必要性を謳っているのである。

◆「認知症ライフサポートモデル」とは、
「認知症の人への医療・介護を含む統合的な生活支援」のことであり、医療も介護も生活支援の一部であることを十分に認識し、医療と介護等が相互の役割・機能を理解しながら、統合的な支援に結びつけていくことを目指そうとする認知症のケアモデルである。
※認知症の人を支えるには、

(1)疾病および体調管理から、日常生活の支援、自己決定に関わることまで、総合的な支援が求められており、

(2)早期から終末期まで地域社会の中で支えていく継続的な関わりを基本に、生活支援を中心とする支援が求められる。

※ライフ(Life)は、「生命」「生活」「人生」等の意味があり、その人が生きてきた人生や、出会いから終末までの継続的な関わりが含まれる言葉である。
サポート(Support)は、支える、支持する等の意味があり、主体は本人であることを前提とする言葉である。

以上の考え方から、今後求められる認知症ケアの新たなステージとして、「認知症ライフサポートモデル」という言葉が選択された。

（資料）ニッセイ基礎研究所「認知症サービス提供の現場からみたケアモデル研究会報告書」(2011)

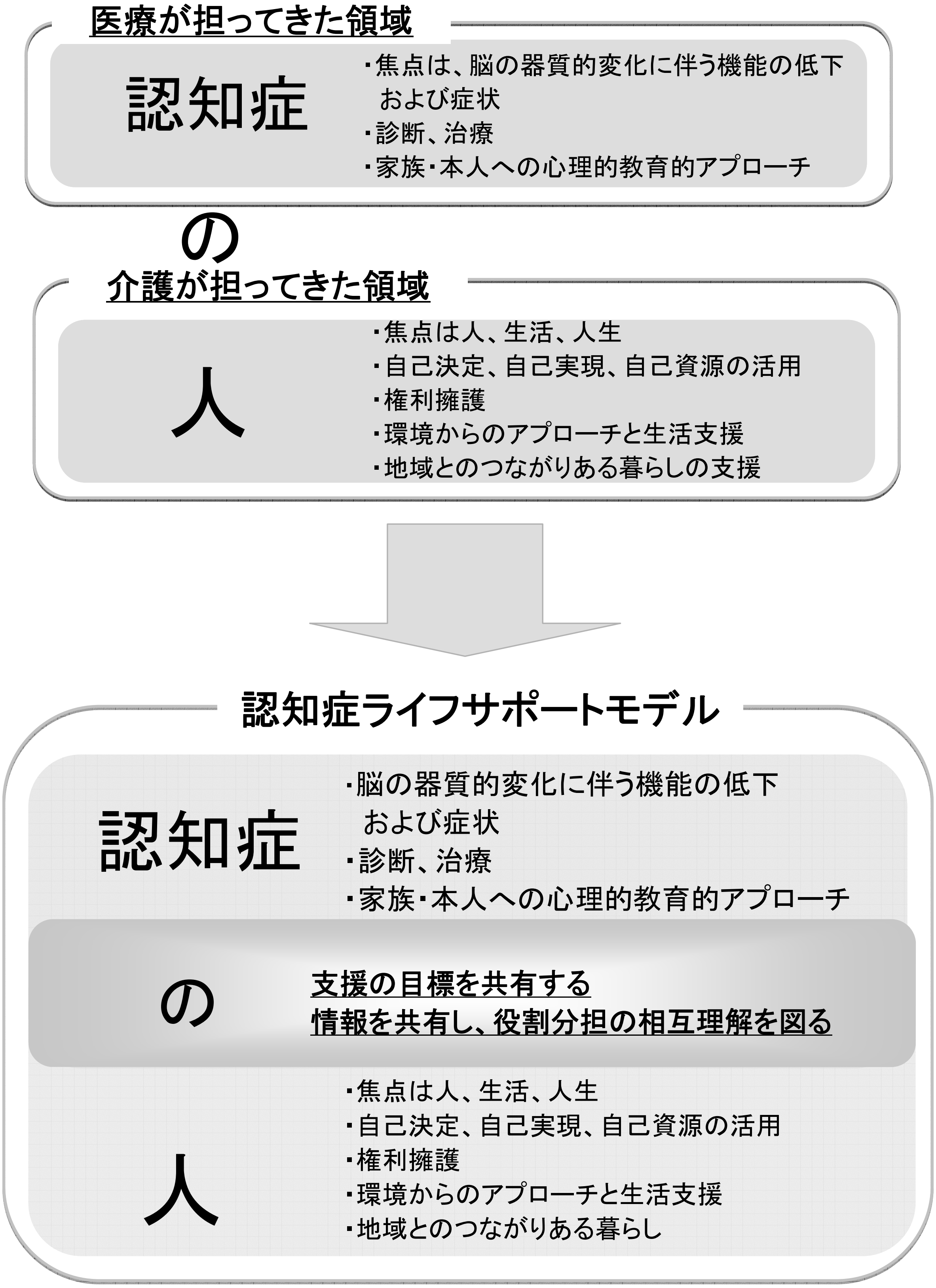

図　認知症ライフサポートモデルの概念図

3──研究事業の経過

認知症ライフサポートモデルに関わる研究事業は、今年で3年目の取組となる。これまでの経過は以下の通りとなっている。

■ 平成23年度

「認知症サービス提供の現場からみたケアモデル研究会」の実施

・認知症サービス提供現場の課題を多角的に整理

・議論認知症ケアモデル（認知症ライフサポートモデル）の策定

・認知症ケアの基本6項目のとりまとめ

■ 平成24年度

「認知症ライフサポートモデルの具体的な検討と多職種協働の基盤づくりに関する研究事業検討委員会」の実施

（成果）

・「認知症ライフサポート研修」のカリキュラムおよび教材の作成

・モデル研修事業の開催

※ご協力いただいた地域・団体の皆様

東京都八王子市（南多摩医療圏認知症疾患医療センター/八王子市健康福祉部高齢者支援課）

兵庫県神戸市（神戸市保健福祉局 高齢福祉部介護保険課）

■平成25年度

① 認知症ライフサポート研修のテキスト作成チームによる、平成24年度に作成したカリキュラムおよび教材のブラッシュアップに向けた試行研修の実施

※ご協力いただいた地域・団体の皆様

愛媛県愛南町（なんぐん地域ケア研究会）

石川県加賀市（南加賀認知症疾患医療センター）

鹿児島県霧島市（霧島市地域密着型サービス事業者連合会）

熊本県山鹿市（山鹿市介護保険課/地域包括支援センター）

福岡県大牟田市（大牟田市保健福祉部長寿社会推進課）

鹿児島県鹿屋市（鹿屋市介護事業者連絡協議会事務局）

鹿児島県鹿児島市（鹿児島市在宅医療連携拠点事業事務局）

②「認知症ライフサポートモデルを実現するための認知症多職種協働研修における効果的な人材育成のあり方に関する調査研究事業検討委員会」の実施

（実施内容）

・カリキュラムおよび教材のブラッシュアップと、映像教材の作成

・「認知症ライフサポート研修」のファシリテータ養成モデル事業の実施

なお、この研究事業の成果に基づき、2012 年 6 月、厚労省の認知症施策検討プロジェクトチームが公表した報告書「今後の認知症施策の方向性について」においては、「「認知症ライフサポートモデル」の研究成果を基に、標準的な医療・介護従事者の協同研修のためのカリキュラムの開発と研修体系の整備を行い、医療従事者・介護従事者の研修機会の確保に一層努める」と明記されている。また、平成 25 年度から 29 年度までの認知症施策の指針を示した「認知症施策推進 5 か年計画（オレンジプラン）」においても、認知症ケアに携わる従事者向けの多職種研修等での活用を促している。

4――研修が目指すもの

以上のように、本研究事業では、今後必要と考えられる認知症ケアモデルを概念化した後、それを普及・推進するための方法として、認知症ケアに携わる多職種が一堂に会してこのことを考えていくための研修モデル、及びその教材を作成してきたところである。

とはいえ、「認知症の人への医療・介護を含む統合的な生活の支援」という概念を、研修を通じて理解してもらえるような具体的なプログラムとして開発することは容易な作業ではなかった。認知症を捉える視点、疾病や症状に関する知識や援助技術の違いなど、専門職ごとに認知症の理解のベースは様々に異なる。また、それぞれの専門職が必要とする知識や技術を学ぶための研修ならば、既に多くのものが作られている。ベースが異なる専門職が集合して行う当研修は、お互いの専門性や役割の違いに気づき、相互の信頼性を高めながら協働へと導いていくことを目指した。各地域の関係者による協力のもと、試行研修を繰り返しながら仕上げた研修プログラムは、「認知症ライフサポートモデル」の基本的な考え方を共有した後に、事例を用いたグループワーク中心の研修内容として仕上げられた。

所要時間は 4 時間程度。認知症の人に関わりを持つ、あらゆる職種の方の参加を想定している。講義内容を学び取るための研修というよりは、講義の中で投げかけられていくテーマにそって、専門職ごとの視点や考え方を出し合い、相互理解を深めていく研修である。教材については今後もさらに精査を重ねていきたいと考えているが、繰り返し実施してきた試行研修での意見を盛り込む中で、「手遅れ型の支援」から「備え型の支援」[1]への転換を目指していこうというメッセージ性も高められてきている。

5――おわりに

たとえば、私（あなた）が認知症になったときに望むこととは何だろう。住み慣れた地域社会の中で、認知症への理解を持つ周りの人に支えられながら自分らしく暮らせること。そして、自分に出来ることをやり続け、自分の意思や好みが尊重されながら、生きがいや希望を持って生きられること。

こうした、人としての尊厳を保つ当たりまえの「願い」は、認知症に対するスティグマによって否

[1] **手遅れ型の支援」と「備え型の支援」について**

「手遅れ型支援」とは、認知症の人の生活上の不都合や困りごとが前面に出てきてからの支援になることで、その場しのぎの対応となったり、本人が望むことよりも家族や専門職側が「こうあるべき」と思うことを優先したりすることとなり、結果として、本人の思いとは違った方向に向かう支援になってしまうことを意味しています。一方、本人から発せられているささいなサインも見落とさずに、本人の QOL を落とさないための多面的な支援を早め早めに提供していくことで、認知症の人が落ち着いてすごせる環境をつくり出し、本人が望む方向での生活支援につなげていくことが可能になると考えられます。このように、「備え型の支援」は、一見、さほど困っていないように見える本人の現状のなかから、本人の望むことを早期に受け取り、生活のしづらさを改善していく予防的な支援を意味しています。

定されてしまうことも少なくない。しかし、認知症ケアの実践現場は日々進化している。これから認知症になる私（あなた）が多くのことをあきらめてしまうことなく、大勢の専門職と仲間に知恵を出し合ってもらいながら、その後の人生を自分らしく暮らしていくことは決して不可能なことではないだろう。「認知症ライフサポート研修」で伝えていきたいことは、認知症の人をどうやって支えていくかという方法論のみならず、当事者意識を持ちながらチームで支援のあり方を考えていくことの大切さである。

現在、「認知症ライフサポート研修」は、厚生労働省により事業化されている「認知症ケアに携わる多職種協働研修（平成 25 年）」（認知症施策推進 5 か年計画促進支援メニュー事業のメニューの一つ）に見合う研修として位置づけられている。今後、市町村ごとに推進していく認知症施策を支える取組みとして、「認知症ライフサポート研修」のプログラム活用と研修会開催を積極的にご検討いただければ幸いである。また、本研究事業の詳細情報については下記弊社ホームページよりダウンロードが可能となっている。

平成 24 年度老人保健健康増進等事業
「認知症ライフサポートモデルの具体的な検討と多職種協働の基盤づくりに関する研究事業報告書」
http://www.nli-research.co.jp/report/misc/2013/p_repo130418-1.html

平成 25 年度老人保健健康増進等事業
「「認知症ライフサポートモデル」の普及・推進に向けた認知症ライフサポート研修テキスト」
http://www.nli-research.co.jp/report/misc/2013/p_repo131029.html